

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



戸次鑑連(道雪)を祀る梅岳寺＝福岡県新宮町

「雷を切った」大友家の猛将

落雷に襲われた際に、この刀で雷を切ったとの逸話から、「雷切丸」と呼ばれるものです。

また、柳川にある近世柳川藩主立花氏の菩提寺福厳寺には、寛永元(1624)年の贊を持つ紙本着色「戸次道雪像」一幅があります。上巻にやや右向きで座り、右手に軍配を持ち、左手を膝に添える姿です。深いしわから晩年の様子を窺ったものと思われ、その大きく見開いた両眼からは、老年とは思えない気迫が伝わってきます。

画像の上部に付された贊文には、「長子」がこの「真影」を描かせて「国家鎮護靈神」として崇敬したとあります。道雪の養嗣子の立花宗茂(初代柳川藩主)がこの画像を描かせたこと、そして宗茂が義父道雪を神格化させて藩を鎮守する「靈神」と位置付けたことが分かります。

立花宗茂は、関ヶ原合戦で西軍に加担して失脚しますが、その後の大坂の陣で戦功を挙げ、元和6(20)年に旧領柳川を回復します。「道雪像」の著贊はその4年後のことで、柳川に復帰した宗茂が、大友氏の最重要家臣だった義父道雪を藩祖として崇敬することで、新しい柳川藩政の基礎を築こうとしたといえるでしょう。贊文後半には、道雪の「無不勝」(負けることのない)百戦錬磨の活躍を賞賛し、「家勢万代之柱礎」とも評しています。

戦に臨んで負けを知らず、大友家きつての猛将としてその名をとどろかせた戸次鑑連(道雪)の人となりをしてのぶ刀剣と画像です。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1回掲載

戸次鑑連(道雪)

戸次鑑連、法名道雪は、大友義鑑と義鎮(宗麟)に仕え、戦国後期大友家の発展に貢献した重臣です。永正10(1513)年の生まれとされ、永禄11(68)年に筑前立花城(福岡市東区、新宮町、久山町)で立花鑑載が反旗を翻して籠城した際、義鎮の命を受けた鑑連は、城を包囲・陥落させて、立花鑑載を討ち取りました。その後の元亀2(71)年、義鎮は鑑連を「立花西城督」に任じて筑前方面を統括させたことから、「立花道雪」

と呼ばれたりもします。島津氏と戦った天正13(85)年の高良山(福岡県久留米市)の陣中で病没し、その遺体は立花城麓の梅岳寺に、母養孝院とともに埋葬されています。

鑑連の所用とされる「脇差無銘(雷切丸)」が、福岡県柳川市の立花家史料館に伝わり、鎌倉時代13世紀の作とされ、刃長は58・5センチ、差裏に金象嵌で「立花飛騨守所持」の後銘が施されています。木陰で雨を避けて休んでいた鑑連が、不意の